運動部

硬式野球部

年月日	場所	大会名	相手校及スコア	バッテリー	部長名	監督名
21・8・15	西宮	第二十八回全国中等学校優勝野球大会	一回戦 芦屋中2—6城東中	有本—橋本	福永 頼一	石田良雄
21・8・27	金沢	第四回近畿中部選抜中等野球大会	準々決勝 芦屋中10—14享栄商	有本—橋本	〃	〃
23・6・13	藤井寺	近畿二府四県大会	決勝 芦屋高2—6立命館高（延長十九回）	有本—福岡	神保 永夫	
23・8・13	甲子園	第十回全国高校野球選手権大会	一回戦 芦屋高4—6桐蔭高	有本—福岡	岸 仁	滝野通則
23・11・3	小倉 豊楽園	第三回国民体育大会	準決勝 芦屋高0—1西京商高	有本—福岡	〃	富永 隆
24・4・6	甲子園	第二回全国選抜高校野球大会	決勝 芦屋高4—6北野高（延長十二回）	有本—福岡	〃	山口
24・6・12	藤井寺	春季近畿大会	決勝 芦屋高6—1桐蔭高	有本—福岡	〃	浜崎
24・8・17	甲子園	第三十一回全国高校野球選手権大会	準々決勝 芦屋高0—5高松一高	有本—福岡	中村 政一	〃
25・4・16	洲本	第一回県下選抜大会	決勝 芦屋高8—6兵庫工高	村上—水田	福山 敏郎	
26・8・18	甲子園	第三十三回全国高校野球選手権大会	準々決勝 芦屋高2—6高松一高	植村—石本	岡村 省吾	古家武夫
26・9・17	館本	東口杯争奪選抜高校野球大会	二回戦 芦屋高1—9平安高	植村—石本	〃	〃
26・10・31	広島	第六回国民体育大会	決勝 芦屋高0—1観音高	植村—石本	〃	〃
26・11・4	和歌山県田辺	秋季近畿大会	決勝 芦屋高3—1八尾高	植村—石本	丸茂 喬	〃
26・11・24	東京 神宮	全国地区代表大会	一回戦 芦屋高1—3土佐高	植村—石本	〃	〃

27・4・3	甲子園	第五回全国選抜高校野球大会	二回戦 芦屋高0—1平安高	植村—石本	〃	〃
27・8・20	甲子園	第三十四回全国高校野球選手権大会	決勝 芦屋高4—1八尾高	植村—石本	〃	橋本修三
27・10・23	仙台	第七回国民体育大会	決勝 芦屋高0—4盛岡商	植村—石本	〃	〃
28・8・15	甲子園	第三十五回全国高校野球選手権大会	二回戦 芦屋高0—1御所実業（延長十一回）	樫田—美濃村	伊東 糾	石田良雄
28・10・24	徳島	第八回国民体育大会	準々決勝 芦屋高1—4浪華商	樫田—美濃村	〃	〃
28・11・21	神戸市民球場	秋季近畿大会	一回戦 芦屋高0—1天理高（延長十一回）	清田—西岡	〃	〃
29・4・3	甲子園	第七回全国選抜高校野球大会	二回戦 芦屋高3—4A鳴門高	清田—西岡	〃	〃
29・6・13	神戸市民球場	春季近畿大会	一回戦 芦屋高3—4浪華商	清田—西岡	〃	〃

（伊東）

陸上競技部

陸上競技部の誕生は、昭和二十一年四月頃である。矢張り、他の部もこの当時より、ある程度の活躍をしていたらしいが、何分、物のない時代だけに、その活動も自然制限されていたらしい。しかし当時の記録に表れた気力というか、馬力というか、とにかくそういう風なものは将に天をつく勢いで、驚くべき意気込みが、まざまざと感ぜられる。

この年、県下中等学校陸上競技大会が現在の神戸高校で開かれているが、記録らしいものもない。

昭和二十三年、七月に姫路で行われた協会支部対抗には、芦屋代表として七名出場、森本満がマラソン八位入賞と活躍を始めた。国体予選には常深四〇〇米予選一着となるも決勝に進み得ず、以後の各種大会に出場、練習を重ねている。十二月に至り、阪神地区高校大会では綜合において県尼崎に次ぎ二着となった。

十二月の駅伝大会では県庁前——姫路間をよく走破し、初めての出場であったが参加四十校中三十位の成績を収めた。

昭和二十四年、兵庫県高校選手権大会に四〇〇米（山下）八〇〇米（村上）、一五〇〇米（井床）、八〇〇米リレーにそ

れぞれ入賞、初めて近畿大会出場、しかも七人の多くの選手をつくった。阪神地区大会では昨年の雪辱を遂げ、県尼を抑え優勝した。

十二月の駅伝大会においては、昨年の逆コース、参加校四十六校中、十七位の好成績のうちに終っている。

昭和二十五年度、兵庫県選手権大会において、八〇〇米リレー（吉村、藤井、太田、矢内）、一〇〇米（矢内）、三段跳（矢内）に入賞、近畿大会に出場した。中でも、八〇〇米リレーでは、力走に力走を続け、兵庫県記録更新、また矢内は十一秒五の記録で、全国選手権大会に出場、これより兵庫短距離界にその勇名を馳せている。

ジュニアー大会で、譜田四〇〇米、友金八〇〇米に入賞した。また阪神地区大会には、昨年に引続き優勝した。

昭和二十六年、三校対抗（灘、御影、芦屋）に敗れて、兵庫県高校選手権大会には、譜田、金井、松村の三人は予選を通過したが入賞は逸した。また国体予選で金井は一〇〇米に好走して入賞している。

昭和二十七年、全国大会予選兼県大会が、丁度試験と重り、出場出来ず、同時に近畿大会にも出場出来なかった。

阪神地区大会には、一同大いに振い優勝した。

三校対抗では二位となったが、対武庫高校戦に大勝し、県下ジュニアー大会に、渡辺昌子（走巾）三位、真城乙洛（四〇〇）四位、八〇〇リレー（土方、北村弟、會和、早川）に六位、女子四〇〇リレー（宍戸、西村、文苛、相原）六位と入賞、阪神地区大会では、大量52点を獲得優勝した。

昭和二十八年、特種目大会に、早川、土方吉川、北村が入賞した。三校対抗には、32点を得て優勝。兵庫県リレー・カーニバルでは、スエーデン・リレーで二位（北村、土方、早川、真城）

近畿高校府県対抗県詮衡大会には山本一定一〇〇米、藤山隆治、走巾跳に二位、三位を得、山本は近畿大会に出場した。その結果、二位となる。

県下ジュニアー大会には、一年山本（一〇〇）藤山（走巾跳）八〇〇リレー（藤山、大西、小倉、山本）にそれぞれ優勝、大西（走高跳）四位の好成績を挙げた。

阪神大会では、32点を得るも、三位となる。またこの年を最後に、女子の活躍を見られなくなったのは残念である。

昭和二十九年、全国大会予選兼県選手権大会に、八〇〇リレー（藤山、大西、真城、山本）が六位に入賞した。

兵庫県ジュニアー大会には、大西常男が走高跳に優勝、山本、藤山が一〇〇、走巾跳に五位とそれぞれ入賞した。

このように三君共入賞。この後、日独対抗陸上大会に、八〇〇リレー・メンバーが招待されたが、連絡不手際で出場出来ず残念であった。

阪神地区大会では、綜合得点で敗れ、三位となった。

県下高校駅伝競走大会は、明石市役所前より須磨公園折返しに、参加校七十校中二十三位の好成績を収めた。一区小林、二区出川、三区山村、四区宇都、五区中尾、六区余田、七区藤山のメンバー、山村、宇都の両君は硬式野球部より、また中尾、宇都の両君は校内マラソンに活躍した二君の応援を得て好走した。

昭和三十年、県下選手権大会で、大西常男は走高跳に一米七三を跳んで優勝。近畿大会に出場したが、当日、彼の正面跳振わず、七位となり、全国大会出場の機会を惜しくも逸した。

秋の大会は、阪神大会、ジュニアー大会、駅伝競走等が予定されているが、何分、部員数少く、また三年生山本、藤山の病気が気懸りだったが、九月より復調、練習を開始したので、残る大会に期待している。

最後に今日まで、よく芦屋高校陸上競技部を育てて下さった顧問の岸仁、上野克巳、平田重行、小前毅、伊東糾、井上瀧也の諸先生に深く感謝しつつ筆をおく。（忽那）

水泳部

敗戦後の混乱と不安の連続、光なき泥沼のような生活を送っていた日本人に、戦後始めて笑と、新しい希望と、自信を取戻させたのは、実に昭和二十四年八月十七日、ロサンゼルスでのあの古橋、橋爪の活躍、千五百米十八分十九秒という世界新記録の樹立だった。

荒廃した国土、何がない彼がないという時にも、外の運動と異って水泳は、設備がなければないなりに何んとか、―（現在なおシーズン初めは借用プールには水がなく山の池で泳いでいる現状で「プールがほしい」は十五年来の部員の悲願である。どうもこの「何んとかなる」をよい事にして後廻し、後廻しとされては国際文化都市、芦屋としても恥かしいし、悲しい事ですが）―誰でも手軽にやれるし、しかも理想的な全身運動、烈日の下に水飛沫を上げる爽快なスポーツであるため、わが部も、昭和二十一年にいち早く復活、戦時中の学徒報国隊水泳班から脱皮して、芦中水泳部の第一歩を雄々しく踏み出している。それから十年、途中、学制改革で芦高水泳部と改名、男女共学、学区制実施による部員の出入移動等幾多の苦難を経つつ、たゆまざる部員の精進は本年幸にして、新村香津子の国体出場という一つの金字塔を打ち立てる事に成功した。以下簡単にその成長振りを、現キャプテン小野口以下の苦心の調査と、芦笛等の記録によって回顧してみたい。

昭和二十一年。仮校舎の附近の本山小学校プールを借受け、主将背泳の末岡を中心に猛練習を開始、初年度ながら県下中等ジュニアー大会には第四位（一書曰第六位）県下中学校大会には第七位を獲得、上々の再出発振りを発揮した。

昭和二十二年。六月より魚崎小学校プールで練習開始、主将森本。フリーの竹元、磯辺バックの寺沢等の活躍がめざましかった。六月下旬、関学中との対戦では、全体としては大敗を喫しているが、五十米、百米のバックでは寺沢が一位、四百米のフリーでは磯辺が一位を占めて、わが校のために気をはいた。七月中旬、神戸市役所プールで行われた三校（二中、三中、芦中）対抗戦では優勝。七月二十七日（宝塚プール）の県下中学校大会では第八位。九月二十一日の中等ジュニアーでは第四位となった。竹元はこの時五十米自由型を三十四秒〇で泳ぎ一着を占めている。

昭和二十三年。主将竹元の下に、四月上旬より練習開始、県下新制高校大会には七位となるも、その後男女共学により主将の竹元から磯辺、杉村まで失い、大野を迎える等生徒移動甚だしく、正に部としては試練の年であった。

昭和二十四年。昨年に引続き今度は学区制で、部員の移動が多かったが、神戸高その他より多数の有望選手を得て、縦横の活躍が出来た模様である。主将は千熊、リレーメムバーの太田、開発、日比、千熊や、五十自由三十八秒〇、百自由一分二十九秒二、二百平三分三十秒二という、女子大野の力泳振りがきわ立っている。三都市対抗神戸地区予選、阪神間高校対抗（三位）、県下高校兼国体予選、西宮市民大会、阪神間市町村対抗（三位）等と試合数も俄然多くなっている。

昭和二十五年。漸く固まってきた部の基礎、学制改革の一段落、前述の如き古傑出現の刺戟、かくて本年度は太田主将の下に若い総力を結集、県下大会では総得点11、順位五位を獲得、プールを持たぬ学校としてはめざましい奮闘振りであった。二百米リレー（玉井、太田、日比、千熊）二分二秒五、百自由太田一分六秒六の記録である。また本年より二中、三中、芦中の対抗戦が、第一回兵庫高校定期戦に発展している。

昭和二十六年――現在。しかし以後の年次では、世の中の落つきと共に、斯界のレベル向上まことに日進月歩であって、同程度のタイムでは、県下大会で入賞出来なくなっている。昭和二十八年、県下大会二百リレー（藤井、木村、石黒、赤鹿）の二分四秒八では決勝九位、二十九年の（小野口、森田、井上、藤井）の二分五秒〇で決勝七位という有様である。もっとも藤井、井上、石黒、赤鹿による二分二秒は阪神地区高校では優勝したのであるが。レベルをおとすまい、何んとか勝ちたいという意欲は、二十七年度（主将外薗）以降、毎年合宿練習をしたり、対市立尼崎高と定期戦を持ったり、今年度の灘、滝川高校との練習試合（優勝）の如く、試合数をできるだけ多くして、地味ながらも血のでるような努力が続けられているのである。かくて阪神地区高校大会では大体毎年二位、三位を維持しているのであるが、プール借用交渉が暗礁にのりあげたり、二十六年の佐野主将が述べる如く練習中「幼稚園から大学生までやってきて大混雑、顔馴染の赤虫、藻以外に消化済みの体内通過品にお眼にかかったりする」と「ああ、プールがほしい」という嘆声が部員全部の口からもれる事となる。

昭和二十八年には、背泳の吉野主将以下、比較的優秀かつ熱心な三年部員を多数有し、先輩諸氏の業績維持に努め、また二十九年には、水泳を部員だけにとどめず、広く校内に開放する目的で、先輩の優勝トロフィの寄贈等の協力により、第一回校内大会を魚崎小学校プールで開催した。三十年度の現小野口主将も三年数名という劣勢の中にも、人眼に立たぬ冬季のトレイニングから始めて、対市尼対県兵庫、阪神六都市対抗何れにも優勝、近畿大会にも井上、新村を送ったのである。

一方女子の方は、毎年部員一、二名という淋しさであるが、二十七年度の楠本匡子（現三年）新村香津子等、一応注目の存在を持ち、遂に九月四日の国体予選で新村は百、二百平二位（一分四一秒四）で国体出場権をかちえたのである。借プールの片隅で、男子の練習も大方終った頃から、細々と不自由をしながら泳いでいた女子部員から、部始まって以来初めての国体出場者がでたというこの事実が更に部発展の好刺戟となること、今一つは十五周年を迎えて、愈々充実期に入った芦高に部員が喉から手の出る程欲しがっているプールが一日も早く設備される事を祈ってこの稿を措くことにする。

（永井）

山岳部

何かの会合の席で自己紹介ということになったとき、これといって特別に趣味も、芸もない人のいわれる言葉に「私の趣味は読書と登山です」というのがよくあるが、これ程登山は一般化され皆に親しまれている。ところで同じ登山といっても、われわれの目指すスポーツ登山と、一般人の考えているハイキング的登山とは異るとはいえ、山岳部は同じ芦高の運動部の中でも、比較的花やかな野球部や、サッカー、ラグビー等々に比し、一般の生徒には余り目立たぬ部のようである。しかし凡そ本校の自治会の創設と同時に創設され幾多先輩の後をうけて、代々の部員の地道ではあるが、着実な努力の累積により漸く今日のレヴェルまで高めて来たのである。その結果、対外試合や競争のないスポーツのわれわれの部にとって、その評価をされる唯一の機会である、国体予選においては例年出場して常に高校の部、一位に推され、県下高校登山界では第一級として認められるに至っているのである。

この部の歴史としては、色々述べていると長くなり、紙面の都合もあるので、創部以来発行され、現在第十八号に至っている部報の中より大きな山行を述べ歴史に代えたい。

――部　史――

昭和二十一年・二十二年度
二・三回生の中島、西畑等により芦中山岳部として発足、部員数十名を有し、近くの山を中心に、基礎技術の習得に専念する。

昭和二十三年度
大台ケ原　大峰山等近畿地方の山々を主体に、幕営の経験を重ね、十二月には新潟県関山にて第一回スキー合宿を行う。

昭和二十四年度、顧問　千速
七・二八―八・一四　第一回夏山、北アルプス、穂高岳槍岳周辺、遠山以下八名
一・二―一・九、第二回スキー合宿、関温泉、遠山以下八名（O・Bを含む、以下同じ）

昭和二十五年度、顧問　津田
八・三―八・一八、第二回夏山、剱岳合宿
立山、針ノ木縦走、広谷以下七名
一〇・二七―一一・一、第五回国体、鈴鹿山系、広谷
一一・二―一一・五、第一回冬季富士登山
広谷以下二名
一・一―一・七、第三回スキー合宿、関温泉、稲頂以下五名
四・一―四・六、第一回春山、唐松岳、小森以下四名

昭和二十六年度、顧問　津田
八・四―八・一〇　第三回夏山、澗沢合宿
穂高槍縦走、小森以下六名
一〇・二五―一〇・三〇、第六回国体、伯耆大山、小森
一一・二―一二・五、第二回冬季富士登山
遠山以下四名
一・一―一・七、第四回スキー合宿、関温泉、小森以下七名
四・一―四・六、第二回春山、唐松岳、砂川以下三名

昭和二十七年度、顧問　津田
七・二三―八・五、第四回夏山、後立山連峰縦走、砂川以下七名
一〇・一七―一〇・二三、第七回国体、鳥海山、砂川
一・一―一・七、第五回スキー合宿、関温泉、砂川以下九名
三・二〇―三・二四、第三回春山、唐松岳、北頂以下二名

昭和二十八年度、顧問　木田
七・二七―八・八、第五回夏山、烏帽子槍穂高縦走、北頂以下八名
一一・二―一一・二五、第三回富士登山
広谷以下三名
一二・三〇―一・七、第六回スキー合宿、関温泉、玉川以下八名
三・二四―四・一、第四回春山、唐松岳、玉川以下四名

昭和二十九年度、顧問　木田
八・一―八・九、第六回夏山、剱、立山、針ノ木縦走、三河以下七名
七・二四―七・二七、第九回国体、大雪山々系、玉川
一二・三一―一・七、第七回スキー合宿、関温泉、三河以下四名

三・二六―三・三一、第五回 春山、乗鞍岳、高木以下五名
昭和三十年度、顧問 津田
八・一―八・八、第七回夏山、後立山連峰縦走、三河以下六名
なお十月下旬丹沢山系における第十回国体には三河が参加の予定である。（津田）

排球部

創立十五周年を迎えたことを部員と共に、先ず喜ぼう。何故なら校舎問題等、学校自体歩んで来た道が苦難の連続であったのだから。それは学校史に譲るとして、その間排球部の活動状況を振り返って見よう。

創立当時―戦時教育の一環として、ボール一つあればの気安さから、一人一部制の強制も手伝って、柔剣道部と共に早くから発足。九月にある県下大会を目標に練習に励んだ。

昭和十六年頃――体育教官指導の下に、放課後夏休みを利用しての猛練習は、低学年者のチーム編成にも拘らず、兵庫県中等学校報国団主催の大会には決勝トーナメント（神戸一中・龍野中・県商）にまで進出することが出来た。

昭和十七年―戦争の苛酷さは、球技一切禁止という軍部よりの弾圧となり、教練一本槍の戦時体制。

終戦まで―勤労奉仕・学徒動員等……校舎焼失……。

昭和二十一年頃―戦後の解放感は、創生期の如く、各運動部再発足し、三回生を五年生とした充実したものとはなったが、物資未だ欠乏。ボール一つにしても馬皮の変形したものの配給制。加うるに、仮校舎・運動場の整備等に大童。宮川小学校時代は、毎日がコート作りが日課となっていた。（これまでの項入谷氏談による）

このような苦労は、部員に必然的に団結心と、忍耐心が着々養成される結果となり、先輩と共にする苦労は、バレーに対する執着心をも持たせることともなったようだ。従ってその後の猛練習は、戦後発足の遅れを取り戻し、他校と互角の試合、否、〃芦屋強し〃の声を聞くようになった。ではその戦績を見よう。

昭和二十三年―男子部・阪神地区第二位（一位県伊丹は県下優勝）女子部・県三高女との男女交流により、女子多数入部、女子部誕生。

昭和二十四年―男子部・春秋阪神地区大会第一位。国体予選には準々決勝戦にまで進出長田高校に惜敗。女子部未だ機熟せず。

昭和二十五年―男子部・阪神地区第一位。全日本予選に三回戦に進出。国体予選に準々決勝に進出。女子部・部員の大半一年生で、もう一歩という段階。将来を期待。

昭和二十六年―男子部・前年度三年生多数卒業のため、この年は苦しい時期であった。チーム編成に苦労し出したのは、この頃からでもある。ただ阪神地区にて、第一位を確保。女子部にとってはこの年は実質的な発足の年でもある。春秋、阪神地区大会にて優勝。秋季大会第二位の成績を攻め、国体予選・全日本予選に初出場。ダークホース的新鋭チームとして注目されるに至った。

昭和二十七年―男子部・春秋、阪神地区大会にて第二位。国体予選に準々決勝に進出。部員不足の実状は今一歩の感。女子部・前年度に引続き大いに飛躍した年でもある。全日本予選で第三位を獲得したことは最高の出来。阪神地区第一位。練習に困る程部員が集まったのもほほえましい。

昭和二十八年―男女子とも、春秋、阪神地区大会に優勝。阪神間において確固たる地保を堅持。目標を全日本・国体予選優勝を目指

してのの闘志は称賛すべきであった。近畿綜合大会には女子部推薦校として出場。

昭和二十九年―男女子とも春秋、阪神大会にて優勝。男子部依然として、チーム編成に苦慮。県下大会は今一歩。女子部、朝日バレーボール大会に優勝。国体予選には準々決勝に進出。県下ベスト8にランクさる。

以上の如く、先輩のコーチ振りと、部員の誠実さは、戦後の発足の遅れを取り戻し、今では阪神間に敵なしとはいえ、県下大会における敗戦の実体を踏み越える段階は、部員一同の団結による精神力の発揮と、毎日の鍛錬による団体美の発揮に待たねばならないだろう。終りに各チームの指導をお願いした顧問の先生を記しておこう。（敬称略）

新谷・花田・土井・中西・津本・福田。（福山）

軟式庭球部

わが部は終戦後間もなく創設され、以後年毎に発展し、短時日にして輝かしい伝統を築き上げた部の一つに数えることが出来よう。勿論われわれも聞き知っている――伝統の薫の幾多先輩の苦難を。現在はどうか。勿論、県下では強敵芦屋の声は高い。しかし今こそ反省の機に至っているのではないか。現状のままで果して、より新しい伝統は生れるだろうか。往時の黄金時代は、再び訪れるだろうか。ここに部史を顧みて「芦高の名」に甘えんとする心を叱咤して、一大躍進の礎を築きなおそう。

二十二年――兵庫県中等庭球仲間入りの時代、将に苦難期、芦中放浪時代のことと、コート難は言語に絶し、物資不足の折柄、ボール入手に四苦八苦、やっと借りた六甲コートは週二回、毎日使用が許可されたのが夏休みから、神保先生と部員に、空閑・木頃の両君を中心に、神戸経大の選手をコーチに願って、技倆の上昇はめざましく、当時の強敵もわずか一中と、灘中の二校となった。

二十三年――発展期（二十五年までを一括してこの名で呼ぶことが出来よう。）九月、県綜合体育大会、摂津地区予選に富久・馬場組、準々決勝、成川・小島組決勝に進み、続く十一月、県下大会摂津地区予選において、成川・小島組、富久・馬場組、横田・柳下組泉谷・平井組の男子四チーム、福田・興地の女子チームは摂津地区の覇者たるの気を吐いた。続く県大会には芦高の名を知らしめたのである。コート難、ボール難未だ去らず、コートを求めて奔走、男女部員の努力によって南運動場（中館南）に不完全ながらわがコートを作り上げた。摂津地区第一位、県下三位の地位を占め、発展の基を築いた主将小島の時代である。顧問、金坂先生。

二十四年――コート完成の喜びも束の間、学区制により、部の三分の二を占める「中三」の部員を失った。しかし一方、今永・山田・服藤・笠谷の優秀メンバー擁するに至り、阪神地区団体戦三位、個人戦では成川・横田組、福田・服藤組は中央決勝に進み、大いに活躍した。主将成川の時代だ。

二十五年――目立った戦績こそないが、全国大会への基礎を作った時代といえよう。九月に第二運動場完成。学校対抗阪神地区大会には住友高に惜敗、その結果二位、中央決勝に福原・下村組、喜多・室井組出場し、喜多・室井組は準々決勝で惜しくも破れた。女子・服藤・福田組の活躍はめざましく国体三次予選に出場、また近畿大会には準決勝に進み男女とも今後にその活躍を期待して、主将沼尻の年は暮れた。

全盛期――これは二十六年より全日本学校対抗に県代表校となった二十八年までという。

二十六年――遂に来た黄金時代、喜多・室井組は全日本・西日本中央決勝を経て、全日本・西日本推薦リーグに出場、九月、白雪杯三位入賞、十月、近県高校大会四位入賞、女子の服藤、金本組は全日本西日本大会の出場権獲得、全日本四位入賞、九月、白雪杯には服藤・今永組が優勝。更に十月、国民体育大会に服藤・金本組三位入賞、全国に芦高の名を知らしめた幸運、喜多主将の時代である。

二十七年――黄金時代なお続く。優秀選手輩出。（私は言いたい――黄金時代も、優秀選手も偶然起ったものでないということを――）福原・室井組の活躍、実にめざましく全日本、西日本二次決勝に優勝、七月、西日本大会に出場、八月、全日本第三位入賞、一方女子、渋谷・町田組は全日西日本二次予選準決勝、西日本大会出場、他に下村・村上組の活躍、二年の中田・皆川組、江崎・島組、若冠一年の成川・富永組の成績も賞すべきものがあった。女子には池田・楠本・尾島・原田・花田の選手を擁し、前途の希望に燃えた主将室井の時代である。

二十八年――県代表校となる。県中央決勝大会において中田・皆川組第二位、成川・富永組第五位、共に西日本全日本大会に出場、中田・皆川組は、西日本大会優勝候補といわれながら敗退したのは惜しまれる。以上二チームに江崎・島組を加えて、学校対抗中央決勝に臨み、強敵滝川高を破って優勝、県代表として全日本大会に出場、これは部創設始めてのことであった。しかしめざましき戦績の得られなかったのは残念であった。（私は痛感した――技量だけではない。精神力、そして体力の如何に大事であるかを）金坂先生就職補導のため多忙、櫛橋が顧問を引継ぐ。主将中田の時代。

二十九年――実力養成期。名門芦屋の名は高く、戦績前期に及ばず。ただ全日出場権を獲得するのみ。辻野・須藤・堀本・和田・女子、藤尾・須田・織田・北山は実力を充分発揮することもなく去った。成川・富永組が中央決勝三位、全日本出場権を獲得、八月これに参加、二年植木・桝岡組が新人大会阪神地区大会に二位、同じく山頃内・小長谷組が三位を獲得した。主将富永の時代である。（私は希望する――女子チームの奮起を、往時の姿今は全くなし）。

三十年――第二の黄金時代遂に来らず。全日県代表校は芦屋か、洲本か、洲本実業かといわれながら敗退した。植木・桝岡、文谷・神例、上野・竹内、山頃内・小長谷の強力四チームを持ちながら、準決勝で洲本実業に服さねばならなかった。しかし文谷・神例組の西日本大会の活躍、植木・桝岡組の全日本大会出場は今なお、芦高軟式庭球部の尽きざる底力を示すものである。受験と運動の両立を不可能とする学生の年毎に増加する現今、現在辿りつつある部の推移を眺める時、二度と再び昔のあの全盛期を招来することが出来ぬのではないかと恐れる。今こそ実力を養い、いたずらに戦績に拘泥せず、第二の発展期の礎をしっかり築き上げておくべきではなかろうか。竹内主将の後を野尻が引継ぎ、幸にも一、二年に優秀選手を豊富に擁えている。やがて大飛躍の時期も訪れよう。（櫛橋）

サッカー部

「かえりみれば一昨年より、昨年にかけての草分時代には、わがサッカー部もボールの不足、グランドの不足、コーチさえなく、サッカーシューズも満足にない状態の下、本山第一校で、ガラス一枚破損することのないようにと気をつけながら毎日々々の練習にはげんだ。……」

芦中の校友会誌、芦笛一九四八年の創刊号をひもとく中に発見したこの一文は更に続けて

「本山第一校をことわられ、第二校を追出され、山手校、精道校……とグランドを求めて転々としつつも、これしきの事にくたばるものかとばかり酷寒猛暑をものともせずの猛練習……」とある。国家が全面降服し、また、校舎を失うという中にあって、何とすばらしい気魄ぞ。衣食住共にきびしかった時代、その昭和二十一年九月にサッカー部はささやかながらも健やかに誕生し、誕生したものの苦難の道の連続がよくうかがわれる。さて引続いて、「その頃より芦屋市の好意により、市民グランドを借用することが出来、我々自身の手により、あこがれのゴール・ポストを、手に豆し、服にペンキをなすりつけながらも一日でも早く完成せんものと、星の空に輝く頃までもかかって無細工なものながらもようやく落成。その時の我々の喜びはどんなであったろうか。塗り立ての緑色のポストバーになごやかな光をなげかけている月に、今一層の努力を誓ったのである」。

「その頃の芦中校舎の分散三部制授業により受けた打撃は大きかった」ともある。二十二年夏、関学主催の大会一回戦で県立一商に敗れ、……しかしそれを契機として部員一同、一層の自覚と努力とにより……秋の県綜合体育大会には準々決勝まで勝残り、大毎主催全国大会兵庫予選第一戦に、伝統を誇る神戸一中を抽籤勝ながらも破るまでになった。

芦笛第二号一九四九年度版によると、――人材を失ったチームは、なかなかうまく回復する事は困難であった。そこで部として新人を募集して個人技、すなわち基礎練習を主として人材の養成に主力を注き、練習試合もあまりやらなかった。学友の悪口に耐え、歯を食いしばって、自己の肉体の過労である事を知りながら、炎天下の二時頃から手の先がしびれる程練習した。実に地味な練習であった。秋に入り活動せんとした時、高一が御影高校と交流を行い、レギュラープレヤー格が二人抜けた。その上古猛者二名が病気のため練習不能となった。――まことに苦難の道である。ただ部草創の精神が、国体県予選は三回戦にまで駒を進め、また全国大会予選では神戸高を破るという戦果をあげしめている。

昭和二十四年度、前期成績は五勝一敗。国民体育大会県予選においては準々決勝まで勝残って、市立神戸に敗れている。この年神戸一中より慶応にすすまれた日本的選手、播磨幸太郎氏、及び関学の柴田氏がコーチして下さる事になり、部員の技術はすこやかにのび翌二十五年の活躍の素地が培われていった。

昭和二十五年度、今シーズン程芦高サッカー部の活躍せることは、創部以来なかった。四月の徳島への遠征をもって本年度を出発した。県下大会において優勝校、神戸高校に準決勝で惜敗。国民体育大会兵庫予選において は国体兵庫県代表校長田高校と準々決勝にて〇対二で敗る。続く大毎主催全国大会兵庫予選においては三田高六対〇、建石高（現市立西宮高）一対〇、準々決勝、対兵庫高一対〇、準決勝対関学一対〇、優勝戦にて再び神戸高と対戦、一対三と勝越されてくやし涙にくれたのである。コーチとして柴田氏が、親身になって当って下さった賜物であると共に部員の精進努力・切磋琢磨はまことに激しいものがあった。

昭和二十六年度、前年度に引き続き名コーチ柴田氏を戴き不断の猛練習と全部員の旺盛なる闘志の結晶として、創部以来の宿願、兵庫制覇、続いて近畿制覇をなしとげ、国民体育大会出場の栄誉をになった。すなわち県下新チーム大会において、優勝戦に関学に一

対二で破れ、自らを鍛えんものと四月、名古屋に遠征。県下春季大会にて神戸高を三対〇、準々決勝対姫路西高二対〇、と駒を進めたが、準決勝、対長田高に〇対二で敗る。西日本選抜大会には高松一高を二対一で屠るも高知農高に〇対一と敗退。しかし国民体育大会兵庫県予選においては、市立西宮二対〇、関学二対一、市立伊丹五対〇、兵庫四対一、神戸高三対一、長田高二対〇と、次々に破り更に近畿大会においては、粉河高二対一、洛陽高三対〇と退けて広島における、第六回国民体育大会へと向ったのである。その第一回戦は春四月、名古屋遠征では一対二で敗けた刈谷高を、逆に二対〇と破って、二回戦対甲府高との試合となる。結果は〇対一。

「国体に敗れたりとはいえ、二十一年秋、部創設以来の宿望、近畿制覇を遂げ、芦高サッカー部の名を全国に大きく謳かした本年度の活躍は特筆されよう。実に四十五勝四敗一引分の好成績である。顧わくば本年度がサッカー部の最盛期でなく、単にサッカー部発展の一過程であり、これを基に将来より大きな業績を残すよう期待する」。と芦笛は絶叫している。

昭和二十七年度、旧チームのベテランが十人も卒業、少数の部員で全国大会予選に出場。準決勝に宿敵神戸高に一対一と迫るも抽籤にて敗る。

昭和二十八年度、多数の先輩の指導下、炎熱鋼を打つ合宿を終え全国大会に臨む。県下大会出場権を得、福崎高を十二対一、兵庫高を一対〇と降し、準決勝にて宿敵神戸高と対勝、辛勝狂喜したが、国体規定に対するわれわれの手落ちと、協会側の不徹底な連絡のため試合無効、再試合となり強豪兵庫工業の前に無念にも屈した。

昭和二十九年度、新人大会に臨み、準決勝に神戸高を一対〇と破るも、決勝にて夢野台に〇対二と名をなさしめる。されども西日本大会に高松工芸高、広島工業高を破り、準決勝にて関学に破れ、第三位となる。全国大会準決勝対兵庫工業高に一対二にて敗る。

昭和三十年度、近畿大会にて優勝。

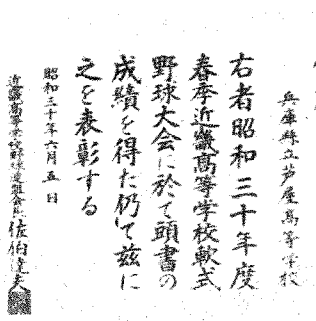
以上芦高サッカー部十年のあゆみを顧みて、第一に感ずる事は、その草創時代のたくましい気魄が、今日正しく伝えられているかどうか、という疑問である。

「初心を忘れるな」という古人のいましめ、今こそ十年昔、サッカー部誕生の二、三年間及び、その後の苦闘時代を再びわが身を以て認識するまでに努めて、サッカー部員たるの悦びを感じ、先輩の血みどろな努力により築かれた伝統を伝えるのが、今日の我々の真の悦び感激ではなかろうか。

（大松）

軟式野球部

軟式野球の学校体育としての歴史は比較的新しく、旧制の中等学校では戦後はじめて運動部の一員として発足したばかりである。本校も昭和二十一年に校友会の一部として軟式野球部が誕生してから現在に至るまで、創設以来僅か十年に過ぎないが、その間



兵庫県大会　優勝　四回
近畿大会　優勝　二回
準優勝　一回

全国大会及び国体出場二回

という輝かしい記録を残している。本校のこの成績は兵庫県下では勿論、最優秀の記録であって、近畿各府県の優秀校と比べても、決して遜色のないものである。この栄史は僅か三千数百坪の狭い運動場を硬、軟両野球部ラグビー部、サッカー部、陸上競技部の各部共用の苦しい条件の下に挙げたものとしてはまことに偉大な成果といわねばなるまい。

次に各年度毎の主要な戦跡をふり返ってみて、先輩諸君の業績に敬意を表し、併せて将来の発展を期したい。

昭和二十一年　芦中軟式野球部創設
（顧問　畑先生）

昭和二十二年　国体予選、兵庫県大会優勝戦で、滝川高に10—2で敗退。

昭和二十三年　現兵庫県高等学校野球連盟理事　樋口先生が顧問に就任、部発展の基礎が築かれたがこの年は不振。

昭和二十四年　国体予選兵庫県大会に初優勝。（対鈴蘭台高4—0）

この年は高校軟式野球連盟の機構改革によって、国体種目から除外されたため、国体軟式野球に代るものとして、桐生市において開催された全国高等学校選抜東西対抗軟式野球大会に、西日本代表として京都府立鴨沂高校とともに出場、前橋高校に3—2で惜敗。（主将新谷。この年から顧問碓井）

昭和二十五年　国体予選兵庫県大会で昨年に引き続き優勝。（対神戸高6A—1）

近畿大会（兼国体予選）に兵庫県代表として出場、次のスコアで優勝、近畿代表として国体出場の栄冠獲得。

対新天高2—0

対京都商3—0

十月、名古屋で開催された第五回国民体育大会に出場。（中日球場）第一回戦で東北代表福島商高と対戦、延長十八回の熱戦の末1A—0で惜敗。全国制覇の好機を逸す。（主将山本）

昭和二十六年　国体予選兵庫県大会に準決勝戦で、神戸高に4A—2で惜敗。

昭和二十七年　国体予選兵庫県大会に優勝。（対洲本実業高11—3）

近畿大会（兼国体予選）に兵庫県代表として出場。優勝戦で京都代表日吉丘高に7—4で惜敗。（主将藤井）

昭和二十八年　無為に終る。

昭和二十九年　前年の不振から立直るべく三年生が進んで勇退、次年度を目標に陣容を

一新して国体予選に臨んだが、一、二年生のみで決勝戦まで進出、赤穂高校と対戦したが延長十回、1A—0で惜敗。

昭和三十年　春季兵庫県大会に優勝。（対赤穂高7—0）

近畿大会に兵庫県代表として出場、圧倒的打力を以て優勝。（主将　林）

対大津西高9—0

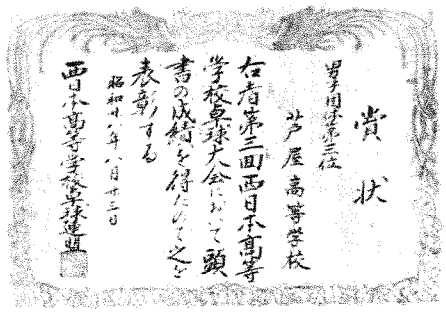
対平　安　高5—3

本年は過去十年間においてチームの実力が最も充実した年であり、夏の国体予選には勿論国体優勝をも狙う絶好の機会であったが、春に優勝したため、各チームのマークするところとなり、遂に準決勝戦にて敗退の止むなきに至った。目下、鋭意新チームの育成に努め、先輩、校友諸兄の御期待に副いたいと覚悟を新たにしている。

（碓井）

卓　球　部

終戦後、文化国家建設を目指して復活したあらゆるスポーツの中で、健全なそしてスマートな卓球が国民スポーツとして、素晴らしい発達をとげ、世界制覇という輝かしい成果をおさめている現在、高等学校にもける卓球部の存在こそ実に有意義であるといえよう。


賞状
男子団体第三位
芦屋高等学校
右者第三回西日本高等学校卓球大会において頭書の成績を得たること之を表彰する
昭和二十年八月十三日
西日本高等学校卓球連盟

そもそもわが卓球部の歴史は、第二次大戦酣の昭和十九年、学徒動員により川西航空へ作業に行っている時から始まるのである。当時はまだ正式な部として誕生していたのではなく、同好会的な存在であったのである。しかし、当時の真に卓球を理解し、愛する生徒達の非常なる熱意と努力により、二年後の二十一年には正式に部として認可されたのである。そしてそれ以来の八年間に、今日の如き発展をみるようになったのであるが、ここにその間の歩みをふりかえってみると、まず部結成後の第一戦は、当時県下第三位の強豪灘中に二連勝するという極めて優秀な滑り出しであった。

そのうちに芦中もいよいよ現在の校舎に移転してから、それまで学校になかった卓球台を他所から借り受け、本館の中央階段を上った所を練習場としたのであるが、何分部員が五十余名もあり、練習らしい練習も出来ず、遂にお願いして講堂使用の許可をいただいのである。そしてそれを機に井上宗弘、長谷川（共に先輩で、部創設の功労者）からそれぞれ卓球台の寄贈を受け、やっと部らしい部になったのである。やがて二十三年共学となるに及び、女子も多数入部し、対外試合にも出場出来るようになり、六月以後十二月までの戦績は、男子十一戦六勝五敗、女子三戦二勝一引分という好成績であった。

二十四年には男子、女子各々一名ずつのコーチを依頼し、将来の飛躍に備えたのであるが、果せるかな部員一同の熱心なる練習と、コーチ、先輩の良き指導により、この一年間にぐんぐんと技術は上達し、二十五年には、

国体都市対抗ダブルスに芦屋市代表として、同市大会で優勝の橋本・松本組が、また国体予選阪神代表として笠松が、更に全日本ジュニヤー大会に、阪神間優勝の酒井が、それぞれ輝かしい成績を残し、翌二十六年には、団体において、兵庫県のベスト四に列する事が出来るようになったのである。更に、二十七年には、団体で京阪神三府県大会で第三位、ダブルスでは、県大会で岡田・小松原組が優勝、三府県大会で第三位、個人では岡田が県大会でベスト四、近畿大会でベスト八、西日本大会に出場と、県大会以上の大会においても好成績を残すことが出来るようになったのである。

二十八年度においては、更に進歩し、名実共に県下高校のトップとなったのである。燦然たる優勝旗を獲得し、卓球部創設以来団体で熱望の近畿大会、西日本大会、全日本大会へと駒を進めたのである。部員の喜び、感激もまた一しおであった。その戦績は、兵庫県大会においては岡田、小松原、平山、前田、中島のメンバーで一回戦から優勝戦まで、全部3対0で破り優勝、近畿大会ではオーダーの失敗から二回戦で同志社高校に惜敗し、西日本大会においては一回戦不戦勝、二回戦は奈良県の一条高校を3対1で、三回戦は岡山県の関西高校を3対2で破り、準決勝においては、この大会の優勝校となった天下の強豪京都の東山高校に2対3で惜くも敗れ、西日本第三位となり、更に全国大会においては一回戦は岩手県の岩谷堂高校を3対0で、二回戦は愛知県の成章高校を3対2で、三回戦は千葉県の佐倉第一高校を3対2で破り、準々決勝において大阪の関西大倉高校に1対3で敗れ、この結果全国ベスト八に列したのである。ダブルスにおいては県大会で平山・前田組と、岡田・小松原組がそれぞれ一位、二位を占め、京阪神三府県大会県予選に岡田・小松原組が第二位、三府県大会では第三位、個人では小松原が全日本硬式選手権の県大会で全部3対0で勝ち進み優勝、京阪神三府県大会県予選に第二位、三府県大会では第三位、近畿綜合体育大会には県代表として出場し、六戦六勝して兵庫県優勝の原動力となり、更に西日本大会においては第五位、また国体にも県代表として出場するという誠に輝かしい成績であった。この成績に更に、発憤した部員一同が猛練習に、人格の陶冶に精進している時に、遺憾ながら第十三号台風により講堂が使用不能となり、以後約一年間は満足な練習も出来ず、本年度を迎えたわけである。しかし現在部員一同は新しい立派な講堂で練習することを許可された感謝と、喜びでもって、また卓球日本の世界制覇という輝かしい成果に奮起して、この一年間の間に出来た他校との技術上の差を取戻すべく、日毎精進に精進を重ねている。

（松本）

ラグビー部

芦屋高校ラグビー部創立が昭和二十二年、この年の対戦成績、二勝十敗。

全国大会兵庫予選

芦屋　0（0—0、0—25）12　37

昭和二十三年度、対戦成績は、二十二戦十勝と昨年度より、試合数も増して健闘している。また、この前後二、三年は、陸上競技部員の県下大会でも相当活躍していた連中が、相当活躍していることが見逃せない。

昭和二十四年、近畿高校七人制ラグビー大会にA・B二組出場して、Aチームは、優勝戦に、淀川工業高校と対戦、10—3と優勝の栄冠を得た。また、国体予選においても県代表として、村野工業と共に近畿大会に出場、準優勝戦に山城高校と対戦、24—10と惜敗し

た。全国大会予選においては準優勝戦に関学と対戦、6—8で、これまた惜敗した。

昭和二十五年、国体予選では、一回戦で敗れたが、全国大会県予選で、決勝戦まで勝ち進みながら、5—16のスコアで、村野工業高校に敗れた。

昭和二十六年、近畿大会に、一回戦で敗れ、国体予選では、またも準決勝で、村野工と対戦、2—23と敗れた。全国大会も同じ、村野工に一回戦で、0—15と敗れている。しかしこの頃は、年一年と対戦成績を向上し、自信をつけている。

昭和二十七年、全国大会予選で敗れて、すぐ新チームを結成、着々その実を挙げていたが、春の阪神地区大会、また近畿大会に、それぞれ優勝し、近畿地区においても、強豪の一つに数えられるようになった。阪神地区大会、伊丹に37—0、鳴尾に46—0、決勝に県尼崎と対戦、43—0と大勝した。近畿大会では、大阪代表、池田高に6—3、京都代表、亀岡高に15—3、決勝で大阪代表、天王寺高と対戦、16—3と快勝、部誕生以来、六年にして初の近畿大会優勝を成し遂げた。

昭和二十七年、国体予選では 県予選において優勝、県代表となり、近畿地区象選に駒を進め、決勝戦において強豪淀川工業と対戦0—9と惜敗、一同涙を呑んだ。全国大会予選では、国体予選に活躍した一同も、一回戦に甲南と対戦、0—3と敗退した。

昭和二十八年、春の阪神地区大会において優勝、続く近畿大会予選で三回戦まで駒を進めたが敗れた。しかしこの年は、幾度か先輩が出場を眼前に控えた国体出場の夢成り、第八回国体に瀬戸内海を渡り、四国松山会場に向った。主な対戦成績

▼阪神地区大会
一回戦28—0報徳　二回戦　棄権　関学
決勝戦25—0県尼崎

▼近畿大会　三回戦　0—8村野

▼国体兵庫予選
準決勝5—0村野工業　決勝3—0甲南

準決勝、決勝と非常に苦しい試合であったが、全員よく頑張り遂に兵庫代表となった。

▼国体一回戦
対新田高校（四国代表）5（0—6 / 5—0）6 芦屋

試合開始直後、相手の反則により、ペナルティー・ゴール成り、先制の3点を挙げる。しかし新田高よくタックルに芦屋の攻撃を阻止、何回もゴール前に迫るも、結局前半6—0に終る。後半に至るや、新田高の反撃物凄く、丁度応援に駆けつけられた校長先生の御声援もあり、後半必死の苦戦の末、遂に1ゴールに抑えて6—5で勝ち残る。

対石巻高校（東北代表）11（3—0 / 8—5）5 芦屋

石巻高校は、開校以来のウェイトを有するといわれる十五人を揃え、しかも猛烈を極めるタックル、突込みに芦屋もよく耐えた。後半に至り猛然と反撃するも、タイム・アップ寸前、ゴール直下に極められ敗れた。

全国大会予選は、国体より帰って日浅く、練習も充分とはいえず、あたら実力を有しながら、決勝で村野工業に30（19—0 / 11—0）0と大敗した。

昭和二十九年、春の阪神大会も、近畿大会と重なり中止となる。近畿大会では、決勝で鳴尾と対戦8—0と破り、西京極における近畿大会に兵庫高と共に、兵庫代表として向う。

近畿大会、一回戦11（3—0 / 8—11）11八尾高校（大阪代表）抽籤勝、準決勝0（0—9 / 0—3）12同志社高（京都代表）

▼国体予選　決勝戦　5（5—3 / 0—16）19　兵庫高

▼全国大会　三回戦　0（0—8 / 0—5）13　兵庫高

▼秩父宮妃 御来校記念試合　16—12芦屋ラ

ガー

昭和三十年、春の近畿大会予選は、毎試合危ぶまれながら決勝まで勝ち残り、関学と熱戦の末、3（0—0 / 3—8）8と惜敗した。

▼国体予選一回戦鳴尾を0—27に敗るも、次に神戸高校に15—8と敗れた。

最後に箒を擱くに当り、芦屋高校ラグビーを、よく今日まで育てて下さった顧問の富永隆先生、永田盛一先生に改めて感謝いたします。

（忽那）

硬式庭球部

わが硬式庭球部は二十三年春、山本、三船小峰等、同好の志が集って発足した。当時は終戦後まだ社会情勢も安定せず、運動用具もなかなか整わず、コートが非常に少なかったので、部員はまずコート探しに連日歩き廻る有様であった。

戦前は東洋一を誇った甲子園クラブがやっと十面余りを再建し、或る者はここで基礎を身につけた。部としてまず、打出の森下仁丹のコートを借り受け、その後、阪国田中のコートを借用して漸く腰を落ちつけ、前記の他今井等十五名余りが練習に励んだ。当時、県下の他校の状況を見ると、甲陽高が全国優勝し、また甲南、神戸、関学が全国的レベルにあって、本校はとても比較にならぬ存在であった。

「二十四年」川廷が入学し、本校のチーム力は一段と飛躍し、また山本、今井等の進歩によって、県下における芦高の地位は一歩々々築きあげられた。まだ全国的レベルには程遠かったが、阪神間大会、県下大会、関西少年選手権には相当のラウンドまで芦高の名が残るようになり、各々目的を目指して技術の練磨に、精神の修養に励んだ。部の主将は山本が最初当り、よく悪条件と戦いながら、部員をリードした。顧問は神保先生から李谷先生に代った。

「二十五年」芦高創立十周年に当り各運動部とも大いに活躍したが、当部においても夏頃より川廷がプレーに堅実味を加え、毎日トーナメント、全国高校大会、関西少年選手権、マックァサー元帥杯大会、全日本兵庫県大会に大いに健闘、全国高校界の第一線に肩を並べた。また最後のシーズンを迎えた、今井、山本、菅井、三宅も強豪選手と互角に対戦し好成績を挙げた。部員一同が夢にまで見たコートが休暇中に完成され、待望のホームコートをもって、一層テニスに励むことを誓い合った。新学期とともに今井より川廷に主将が引つがれ、部員も増加し名実ともに堂々たる庭球部に発展した。年の暮も迫った十二月二十二日から、第一回関西高校大会が行われ、川廷が決勝まで進出、善野に惜敗して二位となり、また善野と組んで復に優勝した。また兵庫県高校大会も復優勝、単は善野に敗れた。この結果、川廷は関西のトップ・プレイヤーに入り、いよいよ最後の年を控えて猛練習を重ねた。

「二十六年」創立以来、この年ほどめざましい活躍の時はなく、また今後再び来るかどうか判らないものであった。川廷がその殆んどの成績を挙げたが、二年の和田が川廷を助けて大いに活躍した。まず、春の兵庫県大会で川廷が優勝、復は和田と組んで二位となった。次いで毎日庭球大会で川廷、善野組で優勝、単は三位を獲得し、昨年に続いてマ元帥杯大会は近畿予選で優勝、全国大会は準決勝で佐藤（法政大）に惜敗した。待望の全国高校選手権は川廷が第五、優勝候補として出場準々で九州のナンバーワン、中野を破り、準決勝で吉村（慶応）に敗れたが、二百三十名中、三位を獲得した。夏の兵庫県大会には、単、復とも優勝。また新人の部で和田は高石

（甲南）に勝って優勝し、野村・船橋組は決勝で高石・浜崎組に敗れた。全日本少年、関西少年、九州少年大会にも川廷が健闘し、近畿高校復で和田と組みタイトルを獲得した。第六回国体は広島で行われ、川廷・伊藤（灘）が出場し決勝まで進出、堂々全国第二位を獲得した。秋の兵庫県大会に三度和田と組み見事優勝、最後を飾った。結局川廷は在学中十八回優勝、九回二位の輝く成績を收め、芦高の名を全国にひろめた。

「二十七年」川廷が卒業して、全くワンマンチームであったので実力は落ちたが、チームとしてまとまり、和田、船橋、野村、伊藤、女子の吉田が大いに活躍し、中でも和田は全国一流選手と肩を並べて健闘、昨、黄金時代を保ち主将として努力した。

「二十八年」前年の主力選手が卒業し、チーム力は低下したが、主将の竹原、船橋、小林等が着々と熟心な練習により進歩の後を見せた。例年行われているO・B現役試合を常日頃も保ち、後進の指導をはかるため「芦高テニス会」を作った。また女子は野々山一人が健闘して気を吐いた。

「二十九年」テニスは年期を必要とするため未だ一、二年しかラケットを握らない者に勝つことを望むのは無理であり、余り期待しなかったが、この年の小林、船橋、松村、堀江中村、永田、それに一年の長尾等は自ら苦労してテニスに励み、いろいろの困難を克服して好成績をあげた。兵庫県は例年全国最高のレベルにあり、私立高校は中学時代からテニスをしているので、それらの第一線に喰い込むことは出来ず、過去、川廷、和田等が得た勝利は到底味わえないが、練習は彼等以上に苦しく、それによって得た成績は例え悪くても立派な堂々たるものなのである。

「三十年」前年に続いて華やかな空気は全然なく、その代り熱心にボールを追う一、二年の部員が大勢おり、一人でも多くテニスを愛じるという目的が十分達成されている。長尾主将、半那、石井は将来性のあるテニスをし彼等の後に続く者を眺めていると、芦高庭球部は創立以来八年を経て、どの校と比較しても決して恥じない伝統と歴史を持ち、そして今後は理想的な運動部に発展して行くことを確信し、その前途は全く心強いものである。

（木田）

籠球部

芦高籠球部の濫觴は昭和二十三年にある。しかし、それは未だ部の形をとらず、当時五回生の杉本博昭を中心に数名の有志によって組織された同好会として出発したものであった。

部として正式に認められたのは翌二十四年であり、部誕生より未だ数年を経るに過ぎないわけである。しかしながら、その間を交錯する歴史は、他部に勝るとも劣らぬ苦難の連続であった。創部当時、顧問の福山先生は次の如く語られている。

『なにしろ、コートもリングもなし、主に甲南のコートを借用と相成ったわけだが、対手側の練習日は厳目、止むを得ず日曜日の夕方出掛けて行ったり、何分その不自由は練習量にも影響する。ボール一個でパス、ドリブルの練習ばかりでは肝心のシュートの基本技が体得出来ぬ。夏休みに甲南高のコートを十日間借りて、通い練習をしたのが最大のコンディションという有様、二学期に二千円で近所の大工に頼み、やっとリングを取りつけた台を一個新調し、これで何とか形をつけようというわけ。勿論こんな状態だから試合に勝った記憶は余りない。それでも県下予選でたしか二回戦まで進んだ時は、全員こおどりして喜んだものである。』

何れにせよ、やっと曲りなりにも出来たコート（現在の中校舎と南校舎の中間）で裸足半裸の群像が描く練習風景は、凡そバスケットボールそのものとは大変な隔りがあったようだが、当時の部員の盛んな意気にはまことに感服すべきものがあった。だが施設の悩みは依然として残されている。バスケットは室内競技として生れ育ったものであるが故に、体育館の有無は致命的な問題であり、創部以来、この懸案が解決出来ないのは何といっても残念なことである。

さて芦高籠球部が創設当時の殻を抜け切ったのは、小前毅先生（現篠山高校在職）を顧問に迎えた昭和二十五年頃からである。常敗のチームが御影・甲陽と三校リーグ戦に優勝大いに気を強くしたのが六月三日。続いて奥田先生顧問の下、昭和二十六年度には、岡西達也（七回生）を中心とする当時のチームが連続国体出場チームであった神戸高と二戦を交え、37～28で快勝した。この勝利は、チームを大いに活気づける端緒となったようで、以後阪神地区リーグ戦、篠山遠征、綜合選手権、国体予選、高校選手権等各公式戦、オープン戦に出場、21勝12敗の成績を得た。その中には王子の広大な体育館で八鹿高に34～14とワンサイドに勝ったこと。県下準優勝校、加古東に接戦の末26～24で惜敗したこと。綜合選手権で三回戦に当大会優勝チーム関学大との一戦等、印象的な試合が少くない。

更に今井豊（八回生）以下の二十七年度チーム、竹中青（九回生）を主将とする二十八年度チームは、更に一層優秀な成績を收めて連続阪神地区を代表、県下に君臨することを得た。

以上の三年間が今までにおいて最も華やかな活動を示した時期であった。

更に特記すべきは、昭和二十六年度の女子部の登場である。森川泰乃（七回生）を中心に本格的活動を開始し、芦高クラブ活動に異彩を放ったことは画期的なものであった。とりわけ創部以来三戦全勝の勢をかって、阪神地区リーグ戦でも初出場にして、国体代表の芦女、強豪女学院に次いで三位を確保したのは天晴れであった。

以上芦高籠球部の歩みを素描して来たが、勿論日未だ浅く、その発展はむしろ今後においてこそ期待さるべきである。

（小松）

拳闘部

芦高拳闘部は、戦後二十一年頃に一部同好者の間に発足したが、その当時は人数も少く終戦早々の混乱などで、ほとんど存在しないような状態であったが、二十三年になって、ライト級楯周治（四回生）フェザー級前原博（五回生）等がまず率先努力して同好会的なものを始めて拳闘部に改め、その基礎を固めた。わが拳闘部が今日あるに至ったのは、全く両先輩の献身的な努力の賜物であって、特に前原博は卒業後も、絶えず後輩の指導に当り、その功績はすこぶる大で、我々はその創設の労を多としなければならない。

当時は道具も勿論不充分で、進駐軍から中古品の払下げがあって、ようやく間に合わした程度であった。県下どこの学校にも練習場などあるはずはなく、練習や試合はたいてい六甲ボクシングジムで行われ、本校も出来る限り六甲へ出かけて行って練習した。六甲ジムもわが拳闘部育ての親の一人である。

二十五年になって第六回卒業生上川泰治が出て、県下高校選手権大会に星陵高校の中塚を敗って優勝した。

二十六年度には第七回生堺昭、横野権衛らがあったが、大して振わなかった。

二十七年度には金江光雄が県下高校選手権大会で準決勝まで進出したが決勝で惜敗し

た。兼子憲治もよく試合に出たが、いつも惜しいところで負けていた。服部立夫が全関西高校フリー級選手権、秋田市で行われた全日本高校選手権大会においてフリー級に優勝した。

二十八年度では服部立夫が全関西高校フリー選手権、関西A級選手選抜大会で、バンタム級選手権を、全日本高校選手権大会の兵庫予選と関西予選で優勝し、北海道で行われた全日本に決勝戦で、関東の菊池に判定敗けした。服部こそはわが拳闘部中興の祖ともいうべきで全国的にその名を知られ、ほとんど勝たざる試合はなかった。後進の指導にも尽してくれて感謝している。

二十九年度では山野井奈々美が主将で頑張ったが優勝とまでは行かなかった。姫路で行われた全日本高校兵庫予選大会にウエルター級川村剛毅が第一位となり、秋の県下大会でも優勝し、福田が第四位であった。

三十年度には県下高校大会でナット級内藤が優勝し、石崎が決勝戦で惜敗した。

（杉山）

柔道部

戦前、報国団の中に占めた柔道部の地位は非常に大きかった。戦後、本校に柔道が復帰したのは、昭和二十五年四月、当時の在校生由利英雄氏（第四回生）の熱意による同好会に端を発し、同志十名ばかりを募り、芦屋警察署道場においての練習に初まる。

翌二十六年四月より、柔道部と改称、顧問小前先生（現篠山高校教諭）幹事岡本泰一、主将岡本秋詹両君（第八回生）の尽力により再発足した。前芦屋市長、猿丸吉右衛門氏（七段）現市会議員久堀幸夫氏（四段）の本校柔道部の発展成長に対する御援助、御協力は誠に大なるものがあり、感謝の他はない。

翌二十七年に至り、顧問、藤原先生を迎え武中啓市（第九回生）を幹事として、著しい進歩を見せている。殊に夏の合宿においては日本軽量級の優勝者である一ノ瀬泰男先輩（第四回生、四段）の熱心にして厳格なる指導により、本校柔道部を軌道に乗せた功績は大なるものがある。八月下旬の近畿大会予選に西村欣祐、渡辺尚文（当時一年）岡本秋詹（当時三年）の三君は、国体近畿大会阪神地区予選に快勝、県下大会において、西村、渡辺両君は近畿大会出場権を獲得し、初陣ながら堂々二位、三位を獲得、その名を阪神地区に認められるに至った。翌二十八年、再び渡辺は、近畿大会に出場、準優勝し、更に二十九年七月、近畿高校柔道大会個人戦に、強豪和歌山を破り優勝を遂げている。その他一般対抗試合にも成果をあげているが、なお一層の練習を必要としている。

部員一同、道場の校内設置を熱望し、実現の暁は飛躍的に名を天下に馳せる日も近いであろう。本年四月より、全国的名選手であった岡本正夫六段を師範に迎え、部員も四十名を越し、主将松山政次郎（現三年）を初め有望な部員が続き、蕭々その成果を大会にあげるべく、連日芦屋警察道場において、猛練習を行っている。

（津村）

剣道部

終戦前ミリタリズム華かな頃、剣道は中学校において正課としてずいぶん旺んに行われていた。報国団の中では最もはなばなしい存在であり、県下大会にも優秀な成績をあげたことがある。戦後いわゆる武士道精神、云々で全く禁止されてしまった。しかし、それも漸次時代の流れと共に緩和され、二十八年四月本校においても、当時三年清水、二年甲斐両君を中心として同好会が作られ、翌年には剣道部として正式に発足した。

道具不足、その上、唯一の練習場たる講堂が、十三号台風で使用不能となるに及んで、ある時は屋上に、または南校舎の空地に練習場を求めるといった悪条件の下で、部員の数こそ微々たるものではあったが、大松・中西両先生の熱心なる指導の下に、忽ち三年甲斐福井、永井の三君は初段を獲得、対外試合にも善戦よく剣道部の存在を他に示した。

現在も相変らず不利な環境の下ではあるがかえって部内の空気は意気大いにあがり、今後の活躍に期待出来るものがある。（檜垣）

書記局外局

図書部

一、読書クラブの誕生

図書部の前身である「読書クラブ」は昭和二十一年、当時三年であった馬淵良俊（五回生）を中心とし、数名の熱心な読書人によって産声をあげた。

当時学校には生徒用の図書は一冊もなかったので、各自が本を持寄り、中継貸出しという面倒な方法をとらねばならなかった。この年十月、漸く校友会に認められ、五〇〇円の予算を始めて会計簿に記入した。

これと期を同じくして、乾・井上両先生がそれぞれ生徒向きの書物を十数冊、また福田先生が改造社の「日本文学全集」を寄贈され生徒達に愛読された。

ところが当時壁新聞であった「校友新聞」が九月からガリ版に、二十二年十一月から活版となり、新聞は本格的に全校的活動を開始するようになったため、クラブは「新聞」と「図書」にわかれ、重点が前者に移った形になってしまった。

二、図書部の発足

「芦中校友会」の中の一つの力強い存在としてその歩みを続けてきた「読書クラブ」が以上のように変化したので、二十三年四月、図書の整備と、貸出しをその本来の目的とする「図書部」が井上先生のおすすめで再発足した。総務部に加えられたものの、貸出しを行うべき図書が全然なく（読書クラブ当時の蔵書は皆無になっていた）設備は勿論、また備品というべきものも持たない、全く白紙の状態から出発したのである。校友会より三万円の予算をもらい、まず百数十冊の図書を求めて、これらを社会科準備室という、廊下の一隅の小さな本箱に入れて貸出しを開始した。十月より五種類余の雑誌の購読も始め、蔵書数も次第に増加していった。当時はこうした苦労の多い仕事の中心になって活躍したのは河本、横山、高馬（何れも五回生）であった。

三、図書部の躍進

廊下の片隅に書架二つ、図書二五〇冊ということも貧弱であった図書室も、二十四年四月からは本階二階の元の事務室を書庫とし、その隣の一教室を閲覧室として一大発展、県より前年度末、学校設備充実費として本校に六七〇万円が支出され、その中約六十五万円が各教科の図書購入費として割当てられることになったので、各科の先生方は連日、京、阪、神方面の書店を廻って約二五〇〇冊の図書を購入、これらをどっと図書室に搬入された。蔵書数が一躍十倍に増加、全く面目を一新した。

この四月、教員の人事交流で県伊丹高校から本校に転任して来られた山田先生を図書部顧問に戴き、茂呂英郎（七回生）が部員達を督励して五月より、この新購入図書を整理、分類し、ラベルを貼り、捺印し、カードを書き、不馴れな手つきと、不十分な知識とではあったが一瀉千里の勢で整理を完了、六月二